

昭和43年10月27日(日)

曇後晴

落成式 参加者：部長 田中裕

来賓 岡田悟様

竹田表治様他2名(和新建設社長)

遠間徳三郎様(妙高高原町長)

竹田之保様(杉野沢財産区管理会会長)

OB：1期松本正雄・嘉納秀明、2期米屋勝利・宮崎紘、3期井上肇・井田貞司・江崎伴雄、4期跡部一博・郡司直樹・谷上俊三、6期菅谷光雄・密島英二、7期東田美智子、8期森正之・溝田隆之・佐木誠夫・高橋弓子・鈴木和子・田中稔・芦川智、永見(?)、現役：9期(4年)三浦皇太郎・朝倉収・木下三男・近藤元恵・鈴木弥栄男・加藤優子、10期(3年)伊藤充彦・丸山英明・村田尚雄・山本陽一・佐藤一祥・鈴木紀子、林俊宏、11期(2年)高橋秀雄・中林康明・稗田省三・野田一夫・丸山純・桜井謙一、二村絹江、長谷川、12期(1年)岡戸秀夫・桐生真紀子、中村、久志本、阿部、神谷、本間千賀子、秋野直子、日下育子、上田、北村(さ)

曇後晴 27日の朝は冷え切った北の空に妙高の外輪山が白いベールをうっすらと、まとっていた。

紅葉に色取られた妙高山、黒姫山の雄々しき姿すべてをすっぱり包み込むような野尻湖の静寂を保ち水面を見晴らすこの地に、我等の山小屋は、より雄大により閑寂に立っている。

これから我々はこの山小屋の柱に、どれ程の思い出を刻み込むことであろうか…

我等の故郷、この山小屋の為に盃を交わそう！

(H. M.)

昭和43年10月28日(月)

晴のち曇

昨日は満天の星空を見上げながら井上さん、伊藤、丸山、佐藤(一)、稗田、中林の6人で語り明かした。

友もすべて去り、一人取り残されたような心持ちd wストーブに手をかざしながらペンを取る。

時折、トタン屋根を打つ雨音が一層私の心に寒さを増す。

しんと更けゆく夜に、ひっそりと静まりかえった小屋の中で、ワングルに費やしてきた3年足らずの年月を思い返す私であるが…

いつの日か、暖かい友の吐息の中で、笑いこぼれる私の姿を、この山小屋の中に思い浮かべる私でもある。孤人、飲んだ冷酒が、ようやく私の心を暖めだした。それと一緒に睡魔も足音をしのばせてやって来たようだ。それじゃ、はるかな友よ、お休み、ア〜ア

(H. M.)

昭和43年10月29日(火)

曇時々雨

友と一緒に太陽も俺から逃げていったのか？ゆうべの雨でできたぬかるみは、一向に消えそうもない。

インスタントラーメンで朝食を済ませると、今にも降り出しそうな空の下を、かさを一本たずさえてフラッと外へ出た。風が吹く度に枯葉がサラサラと落ちる。雪でこの辺りがおおわれるのも、もうじきだろう。武庫川の小屋まで行って見たが、窓が固く閉ざされていた。意気消沈して帰ると雨が降り出した。まったくついてない。ストーブの石油も切れたので入れなきゃならない。昼メシは、またラーメンにするか。

(H. M.)

寄贈品一覧表 高橋俊吾殿 (コピー判読不能)

昭和43年11月5日(火)

晴

高橋/安藤/山下

11:30 AM 山小屋着。雲一つない空に、妙高、黒姫がくっきり浮かんでいた。荷物の整理をして、床のワックスをかけた。はじめてのワックスがけだ。毎年一年生はこれでしごかれるであろう。カレーを作った。マキがよくもえる。

5:00 PM、杉の沢に下る。

昭和43年11月6日(水)

雨

一晚、杉の沢の岡田サンの所でとめてもらった。ジャガイモをもらって、歩いて帰る。冬季のための、食糧だが、どうやって貯蔵したらいいものか。朝から雨である。ひよっとすると雪に変わるかもしれない。

(高橋)

昭和43年11月16日(土)

雪

21:30 到着 MEMBER L石橋 CF日下 SK岡戸 HB長谷川

23:30 到着 MEMBER L村田 GM嶋田 BY納口 岡田様宅での食事内容

石橋さん…飯4はい、なめこ汁3はい、もち5こ、(他に和親さん宅にて リンゴ2こ、もち菓子2こ) 日下さん…もち2こ

岡戸…もち4こ
長谷川…もち4こ
村田さん…ビール1本、リンゴ1こ
嶋田…ビール半本、リンゴ1こ
納口…ビール半本、リンゴ1こ、漬物1皿
本日の行動(昨日の夜行列車中を含む)

石橋氏…孤独に耐える訓練であろうか。夜行列車も一人で乗ったのである。岡田さんの家へも一人先に到着し昼寝をしていたのである。我々が到着するや否や夜道を山小屋まで歩かせるのである。こんな男、それが建築科の〇〇〇〇である。

日下さん、岡戸、長谷川・・・イキトウゴウ。ホンジツの行動はまことにすばらしいものであった。

村田氏他2名・・・全くとるにたらない行動である。ここに書く価値なし。唯、ビールを飲んだことはいやはやまいったね。(高橋)

昭和43年11月17日(日)

雪

仕事内容

C. 石橋氏他岡戸、長谷川

吹雪の中を杉の沢まで材木をとりに行く。何故に我々はこの苦しみを受けなければならないのだろうか。又、我々が行かされたもう一つの理由がある。それは食料が全くないために買い出しに出ることである。山に食料を なにも持たないで来るとはこれいかに!

C. 村田氏、Mr. 竹中(別名丹羽氏)、納口、嶋田。…テラスのペンキ塗りだけ。(正味15分)

日下さん…自分は食わずに全員の食料を確保すること。

《本日のトピックス》 村田氏、日下さんにプロポーズ⇒(結果)無惨にも念願果たされず(こんなことがもしあるとしたら、この様な結果になることは当然の理であろう。)(高橋)

昭和43年11月18日(月)

吹雪

6:00 起床

昨日、やり残した仕事が多い為、早朝にたたき起こされた。その途中の僅かな時間を費やして行われた人物批評は次の通りである。

{村田尚雄}*1年生の時 自己の力を過信しすぎ 現在においてはエピキュリアンの生活を送っている。
*寝台列車、同伴きっさ、台湾*60° *欲情の昂じたロマンチスト *村田一家組長 *ワングル内で最も自己を主張する者、つまりサークルにとって

はマイナス面大、でも尊敬できる人 *女に対する理想の低い人 *僕の敵ではない人

{丸山英明}*へなちょこ男 *オカマ *色気づいたメガネ猿 * (付ろく) いい人

{大塚正雄}*メガネ猿の兄弟 *岡戸、江川の恋仇 *紀伊国屋よう子 *少女趣味のあまえん坊

{中間千賀子}*岡戸の初恋の人にとても似てる人 *落ち着いた大人のムード *情熱を内に秘めた冷たさ *ひき立て役

{桜井謙一}*どうにでもなる人 *他人に対するコンプレックスの固まり *とらえどころのない人 *『ヌカニクギ』 *仏教的

{中林康明}*少女趣味 *特技 振られること *ロマンチスト(?) *ごますりのきく男 *女性にでれでれ *二枚目になりたがる

{伊藤}*バカ *容量合理主義者 *ワングル埋没主義者 *ひとのいい個人主義者 *女のしりを追いかけてばかりいるフェミニスト

{秋野直子}*64方美人 *秋野党党首(党員 北村(), 江川、大塚(), 石橋) その他孤独で攻める村田) *策略家 *pondと同じ(ポンドのきき) *男をその気にさせて一歩手前でポイツと捨てる女

{桐生}*取り得助教授の娘(6万円所有)

{望月章子}*本当に健康的な女性*90-90-90

{丹羽ひろみ}*ミッキーマウス

《日下育子》*悩みのない女性 *悩む女性 *幸せな女性 *幸せにしたい女性 *岩陰にさくカレンユリ

次回は御気持

(長谷川)

昭和43年11月23日(土)

晴

11/22 10:59 上野発(実際は発車が10分遅れた)

11/23 6:50 田口着

7:30 杉野沢着 「杉野沢では岡田さん宅へまず行って 横浜より持ってきた落成式記念品と主将にたのまれたYV SKYLINEのback number 3冊を渡してから、ベランダの板張りはしない という伝言を言い始めると 岡田さん言下に板張りせにゃ あの山小屋一年もせぬうちにだめになるよ、と俺達の言うことを押さえて、積雪のものすごい重みのことを強調し、俺たちは返す言葉もなく、ことわるにことわり切れず、岡田さん宅を後にした。無駄だといわれたが 山下が苦勞してもってきたビニール、言われたとうりベランダに張ることに山下と竹内さん宅へ行く途中で決めた。

主将がたのんでおいた角材とベニヤ、何寸角か(連絡が不徹底だったとみえ) わからなかったとかで

竹内さんではまだ用意しておらず、すぐ電気ノコで一寸角の角材 一間の長さのもの16本引いてもらった。山下と二人でその間 買い出しをしていたところ 岡田さんが 又来て 山小屋までの車の調達をしてくれた。そのお礼にたばこを・・・といわれ、2箱買って来た。原材を運ぶためのような大型のトラックで、山下と俺の他、3人の中年の男の人と後の荷台に便乗した。車がでるとき、あわてたので 途中で 竹内さんで用意してもらった釘を忘れてきた事に気付いたが 又杉野沢へ買い出しに行くこともあると そのまま小屋まで行った。トラックからおりる時、運チャンにたばこをあげたが いいいいとなかなか受け取らなかった。」

山小屋 9:00 着

トラックの上から見たと同様 山小屋周辺にはほとんど雪がなくがっかり。オーバーシューズ、オーバーズボン、革手袋、その他冬山装備まで用意してきた山下は、おれ以上がっかりしていた。(太田)山小屋の入口の扉がガラス戸なのは意外だった。ひととおり山小屋の中を見て一服してから食料の必要なものを調べて 10:30 杉野沢へと出かけた。行きはランニングと歩き、帰りは杉野沢から妙高高原スキーロッジまで小型トラックに乗せてもらい、それから歩き。

12:20 山小屋着 それから山下とインスタントラーメンをつくり食べた。2:00まで昼寝などしてから、ベランダにビニール張りの作業をはじめた。歌の文句ではないが、作業中、『無駄と知りつつ 張りました♪♪』などと思った。

ビニールはたっぷりあったが、テープがまったくたりず、最後は手を抜いた仕事をやることになってしまった。・・・ワングルの連中の考えることは甘いな・・・ベランダの前に板張りしないで一冬もつと考えたり・・・YWV 部員=甘い考えの持主、オポチュニスト。

3:30 作業終了 雨戸は明日 北村も来てからつくことにした。

5:00 メシの準備 (4:00 山下が天気図をとる) これから3日分と・・・8皿用のカレーのもとで身をたくさんいれ、随分水増して液状のカレーをつくった。それでも国大の食堂のカレーよりうまかった。(本当に!) 7:00 から 11:00 まで 歌をうたったりだべったり・・・二人でワングル観 サークル論(?)をたたかわせた。さえた二人が話し合ったんだから内容はおして知るべし!!用たしに 外に出てあおぐ空に星がこぼれんばかりに輝いていた。そういえばラジオでも先程 明日の天気は快晴と告げていたっけ。空にある星すべてが今 俺の頭上にあるという気がした。星の名前位おぼえたい。それから星についていろいろな秘められた物語も知りたかった。野尻湖方面の街の光も星座のように輝

き その光がゆらゆら ゆれていた。小屋の中で二人のはなしもつき 11:00 山下が先にねて、俺もしばらくして眠りについた。

今日考えたこと

*この山小屋はどのくらいもつだろうか、(山下と二人で昼間 小屋の中で横になり休んでいるとき、少々強い風がふいた時、小屋がゆれたのにはびっくりした)

*ワングル部員は物質的にもっと質素に 精神的に素朴になるべし。

*ワングルというサークルは何と様々な問題をはらんでいることか(それでもYWVは動いていく・・・) 進歩か退歩か・・・ ?

*すべてのYWV部員よ 団結せよ・・・空疎?

*いかに俺たちの技術が未熟か

*技術に裏付けられた山行中の余裕。そのうえでの山行の楽しみ・・・これをめぞう・・・

*今日は勤労感謝の日、今日の労働の成果をおもい 夕めしのカレーがうまかった。

昭和43年11月24日(日)

11/23 22:59 上野発

11/24 6:54 田口着

雪はまったく無し。まことに残念、小屋につく前から帰りたくなる。8:00頃 第1発の大キジ、スーッとした。8:10 国際ロッジにて山下に会う。イヤー、暑いものなのって初冬の妙高高原が、こんなに暑いものとは知らなんだ。

親友というのは、ほんとにありがたい(?)。ちゃんと仕事を残しておいてくれるとわ。サテ、仕事を始める段になって、小屋にノコギリがない。長谷川の野郎、絶対にあるとぬかしやがったくせしやがって。ナタで脳天、ぶちわってやりたいよ。とわ、いうものの、我ら三人、頭のサエタ者ばかり。道具がないにもかかわらず、仕事は、すべて順調に行く。五時までにすべて完了。一同、御満悦の表情、といったところ。夕メシはカレーだそう。うまくないんだよ、これが。アア、眠たいヨ、彼女に会いたいナ。断っておくが、俺の言ってる彼女は、ワングルのアイツじゃネーゾー。俺は秋野党党員から脱退させてもらうよ。あとに残った奴等で、四つどもえの奪い合いでもやりやがれ。もてない奴等どうして。ウッシッシー。 日下さんの差入れ、羊かん、ピーナッツ、おいしかったナ。日下さんて、いい娘(こ)だナ。どうしてみんな、わかってあげないんだろ。みんな、目くらなんじゃないか、なんて噂がボチボチ。

(北村)

北村が入り、山小屋の品が落ちた感じ、太田がつられてますます俺が一人で苦勞する。 北村が入った

が 食料をもってこず、俺のくいぶちが減る。太田はおかまいなしに食い続ける。俺ががまんしなくてはならない。山小屋は住みにくい所だ。午後から妙高方向から雲がでてきた。これは雪が降るとよるこんだが、しばらくして天から落ちてきたのは水であった。雪国だからといって、こんな暑く（太田ははだかで仕事をしたほど）ては、雪は降らないのだと初めて気がつく。おれがねむいといったら 太田はいつしゅん喜びを顔に浮かべ、「仕事のし過ぎだからはやく寝たほうがいい」（当然のことであるが）という。北村が頭が痛いといえはますます喜び、ねることを勧める。太田の魂胆は明白である。ミカンの缶詰を一人で食べる気だ。こっちはねるわけにはいかない。（山下）

賢明なるワングル部員諸君に告ぐ、上述の内容に関して、事実を知る意欲を持ち、冷静に判断してくれることを声を大にして叫ぶ…（太田）

昭和43年11月24日（日）

雨（このなさけないこと）後ガス

7:15 起床。この時刻は二人が起きた時間であって、私はすでに4:00 目をさましていた。雨が猛烈に降っていた。おかげで寒くない。二人のすこやかな寝息をききながら、私は空腹な腹を抱えて我慢していた。後で二人は、俺が朝食を作っておけばよかつたとぬかしやがった。考えてみればそうかもしれない。今日の行動予定を大幅に変えて一日ゴロゴロすることに決めた。なんとなさけないことよ。

9:00 朝食、ハンゴウ2本（2本とも太田がさらった）、のり2枚、たくわん（しっぽの方半分）、おかか（ここにきてこれは毎食 口にいられている）、みそ汁（わかめをたっぷり入れ、岡田さんからもらったみそで作る。7、8人分作ってしまったので当然残った）、カレー（これは2日前に作ったもの、カレーの味がなにもしないから、カレーというのは不適當である、太田だけ喰った）

3人の食べたもの

北村：ドングリ2はい（一はいはお茶漬、なんとユウガなことよ）、のり 1/3 以上、たくわん 1/3 程度、おかか少々、お茶多量

太田：ドングリ3はい、のり 1/3 以上、たくわん 1/3 以上、おかかたくさん、みそ汁1はい、カレーどんぶりに一はい（いっぱい）、（なお太田はこの前に、日下差入れの南京豆をかかえて食べていたのをおぼえている）

山下：ドングリ軽く2はい、訂正 どんぶり山盛3はい（太田） のり少々、たくわん少々、おかか まあたくさん、みそ汁2はい、お茶1はい、（い

つもながら私は食べない）

9:30 以後 太田は外へ出て、木をほり出した。何をつくるのかは分からない、よせばいいのに、大きな木を相手にしている。せいぜい出来て木くずと、まきと、ナイフのはこぼれぐらいである。山小屋とランプのスケッチも書いた。なかなかうまい、やはり建築科だけある。北村は食べおわってから一歩も動かず歌ばかり歌っている。声もいいし、音程もいい、やはり俺の歌をよく聞いているからだろう。（山下）

朝 目をさますと、ノドが痛い。前夜から頭痛がしていたが、カゼをひいたらしい。体の節々がいたい。さむけもするので、熱があるようだ。朝めしは、食欲がないので、あまり食べない。食欲がないのは、カゼばかりでなしに、太田、山下の食いっぷりにもよるのだろう。とにかく よく食う奴等だ。ろくにおかずもないのに、朝からドングリ3はいをペロリ。これを見れば、だれだって、気持ち悪くまるのは当たり前。

10:00 おやつ

日下さし入れのピーナッツ、チョコレート、ふた山ずつ（ほんとは、まだあるのだが、山下は、しまってしまった）、バターココナッツ七枚、かきもち少々、あめ五つぶ。ただし、これは帰るまで もたせなければならぬ。山下は、飯のしたく以外、ほとんど何もせず、プレイボーイを、むさぼりつくように、読みふけている。カワイソーに欲求不満と見える。太田は、歌とも、犬のほえ声ともつかぬものを歌いながら、これまた、どうでもいいうような、絵だか、いたずら書きだかを書いている。俺はハイソサエティーに、ただ瞑想にふける。

（追） なお、おやつにミルクがでた。山下、俺1はい、太田3はい。（よく食うし、よく飲む）。純生ミルクを想像してか、みんなの顔は生き生きしている。ただ、不思議なことは、これだけ食うくせに、大キジには、あまり行かないということ。どうなってんだろ一。（北村）

山小屋でボサッと、ボケッとしていても仕方がないと、外はガスっていたが、笹ヶ峰まで出掛けようと俺が提案。山下は一つ返事ですぐ乗ってきた、北村は、横になってばかりいて、どこへも動いて行きたくない様子だったが、一人では残っていてもおもしろくないと思ったのか、何とか腰へ上げて行くといってきた。

持ち物：みかん、りんご、バターココナッツ、チーズ、スパッツ、キルティング

道がぬかかっていて歩きにくい。山下はサブザックに荷をつめ、一人で持つと聞いて聞かないので、北村と俺とで まあ仕方がない、食べ物ばかりはいっ

ていて中身が心配だったが、持たしてやろうときめた。三本木まで行ったところで、山下が急に「もうがまんできない！」というなり、サブザックを道路の真ん中にほっぽりなげ、紙を片手に、繁みの中へ一直線……。俺と北村は、ははーん……。と、事情を察して気長に待つことにした。ようやく山下がもどってから又、三人、笹ヶ峰へむかう。6, 7分歩いたところで、武庫川女子大の山小屋入口に着き、一寸よってみようと三人、小屋の方へ下りていった。小屋は鍵がかかっているが誰もいなかった。小屋の形は平凡でさして特長がないが、トビラがアルミサッシのしっかりしたものがついていて、俺たち国大の山小屋より数段御立派！！小屋の周辺は国大の方がはるかにまさっていて、三人一同、たいしたところじゃないな、とうさばらし……。 (誰もいなかったから……)。軒の下に大きな鐘がなかったので、ひもをひくと、あたり一面にひびくような大きな音(わりにいい音がした)がした。やはり女子大の山小屋らしい。それは、一カ所雨戸が鍵がかかっているが、それを引きあけるとガラス戸ごしにカーテンがさがっているのを見た時にも感じた。ここで今度は、俺が用足しに繁みの中へ。しばらくして北村と山下のところへ行くと、もうここで帰ろう、と言う。「ガスっていて景色も見えないし、いってもつまらない……」と……。帰りも遅くなるし、小屋に帰ってゆっくりしようというので、三人意見一致で国大の小屋へもどることにした。途中、北村が用足しに繁みの中へ。結局 笹ヶ峰へむかったが、三人共きじ打ちしただけで帰ってくる羽目となった。全くおそまつでした。でも、小屋でぶらぶらして運動不足がみだつたから歩いただけでもよかった。

小屋へ帰って思ったこと。この山小屋、うまく活用しないと、本当に国大ワンゲルの活動を停滞させることになりかねないぞ。 (太田)

昭和43年12月29日(日)

雪
佐木、池原、佐木(弟)入山。高谷池をねらうため、スキー冬山装備多く、2回に分けて荷上げ。第1回目、杉野沢リフトは歩き、第2・第1リフトは乗ったがキスリングでは不安定。決死の覚悟である。第2回目、杉野沢リフトは乗ったが、第1・第2リフトは時間切れ、歩き。結局 杉野沢から全コース歩いたことになる。全荷上げを終わったのは夜6時。すでに真っ暗である。積雪40cm。(森正之8期)
朝 東京発 杉野沢から第1リフトまでは歩くが、荷物があまりにも多く、リフトの誘惑には勝てず、第1、第2リフトにキスリングを背負って乗る。小屋に全物資を運び上げた時は すでに真っ暗になっていた。(佐木誠8期)

昭和43年12月30日(月)

にわか雪

森入山。小屋に人無く、三人は高谷池へのテイスツに向かっているらしい。

21:30 就寝。

明日の行動予定(池原、佐木×2)

12月31日、4時30分起床。5時30分出発。笹ヶ峰を経て、今日の荷上げ地点まで行き、高谷池に向かう。高谷池どまり。

1月1日 火打。アタックの機会をねらうが無理せず、その日のうちに帰る。ビバーク用具、スキー用具一式、食糧1月3日朝まで。他に予備2食。

二日前より降り出した雪はこの高原にやっと赤青等の花を咲かせる。充分とまでいかないが積雪40cm どうかすべれる。雪質は粉。湿りけなく最高。まだブッシュが出ているのが気になる。後続隊は入って来るまでにもう少し降ってくれるといいと思うが、高谷池アタックの間は晴れてほしい。

現在 風は妙高おろし。屋根の雪は自然落下するが そのためか 屋根のトタンが 風が吹くたびにバタバタなる。場所を確かめて 直せるものなら直さなければならぬ。小屋内部 中央 暖炉付近。雪が舞い込んでかなりの積雪になる。又、他に周辺部、二階畳上にも雪。すきま風各所。どこか一カ所、一坪でもいい、二重構造にしたい。裏のベランダの上は 雪30~40cm、屋根の雪が落ちて 特に多い。

社会に出て忙しく、気疲れする毎を送り、昨日まで会社で 今日 山へ入るといふような場合、どうも落ち着かない。気持ちがそぐわない と言ったらいいのだろうか、丁度、山男が高級レストランに行った時に感ずる、あの一種特有な気持、この場合はレストランの貴婦人の目に代わって、山の雰囲気ということになるが、それが気になってしょうがない。山へ 自然へ入りたいという 気持ちはあせるが今までの生活が、又、この交通便利、容易に入れるという環境が心をしてここまで到達さしえない。山へはいる気持ちのアプローチができていないということなのだ。確かに雪の山を見れば美しいと思ひ、水の流れをみると清らかだと思ふ。しかし それ以上発展しない心は どうすることもできない。山を感ずるといふことができない。思ひ出して昔したように 戯れもし、愛撫もしてみるが、それは虚ろな動作にしか思えない。自然なる気持ちから発してないのである。そして、無理をせず ただ山へ入ることを楽しみにして来ると往々にして山における行動の無気力というどうしようもない疫病神にとりつかれる。(森正之8期)

偵察 火打岳へ向かうルートは次の三つが考えられる。(地図あり：略)

1. 笹ヶ峰→ 高野池→火打
2. 笹ヶ峰→夏道→高野池→火打
3. 笹ヶ峰牧場→笹ヶ峰→稜線ゾタイ→高野池→火打

1. のルートは 三田原山にビバークの必要があり、この際は考えない。一番ルートとして確実な2. の夏道を通るルートを偵察する。今年は雪が少なく非常に 池原に 登れそうである。以下 池原に続く (佐木8期)

昭和44年1月1日(水)

明けましておめでとうございます。

昨年1年間はワングルにとっても画期的な年でありました。10周年を迎えてこの山小屋を心の古郷として益々発展せむことを心から望んでおります。ここまでクラブを発展させ、山小屋まで建てるに至った諸先輩方、又、現役皆様様に新年の挨拶と共に、感謝申し上げたいと思います。私、個人としても 昨年は色々な事があった年でございました。卒業・入社 又個人的生活、精神的な面にも記念すべき年でございました。この1年が 今年の発展に通じるか、墮落に通じるか、今申し上げる自信はありませんが、自分なりに納得のいく年にしていきたいと思っております。

昭和44年元旦 第8期 森正之 (森正之<08>)

雪も小降りになり、風もなく、望んでいた新年そのものである。唐松の小梢 小梢には雪が付き、林の奥まではてしなく続いている。雪面に足跡なく、雪林に人気なし。そこに立ち入るは罪人なり。見るがいい、知るがいい、小雪舞う この林を。林の向こうに夢があろうとも 美しきもの犯すは罪人なり。心に見よ、雪の向こうの、林の向こうの 果てしなき自由なる 美しき世界を。 (森正之<08>)

6:30 元旦の午後、うつらうつら 眠るともなく眠っていたら、武庫川の女の子三人来訪。OB1人、3年2人。美人というんじゃないけれど、皆な愛くるしい顔しとる。よく食ってよく飲んで(紅茶)、歌をうたって陽気に帰っていった。雪はまだ降り続けている。アタックの3人はまだ帰ってこない。昨日天気悪く、今日は新雪だったので今日は無理かもしれない。すぐ食べられるように飯だけは炊いておこう。武庫川さんの合手していたら すっかり遅くなってしまった。面倒でも お隣さんだから、仲良くしておかなければならない。今後 どんな迷惑か

けるかわからないのだから。

『紙面を借りて申し上げる。現役諸君よ、関西のトップレディーを おろそかにするなかれ。君達よりも子供(世間知らず)だけど、山のレベルでは勝っている。今日来た内の一人は 明日小谷温泉に行くという。くやしかったら やってみるがいい。』

今年初めて会った人は武庫川の女の子だった。これが1年間続いたら幸せと言おうか?

「天気予報」 長野北部では風雪が強くなり 1mを越えるとのこと。現在ラッセル車 運転中、汽車の遅れもめだつとのこと。

ストウ、上島よ、すまねえな、せっかく帰ってきたのに、会えないかもしれないな。同じ仕事についていて 俺一人 どこか他の方向に向かっているようで しょうがない。今年は何とかするつもりだ。今はだから 会いたくない、ウソウソウソ。やっぱりお前らには会いたい。会って話したい。顔見てるだけでもいい。

お世話になりました。武庫川女子大

現在7時のニュース。南区清水ヶ丘 横浜国立大学経済学部食堂付近より出火。現在3棟を焼いて延焼中とのこと。部室も燃えたかもしれない。国大にとって火事の1月、5年前の1月を思い出す。部室の 焼けていないことを望む。

9:15 アタック隊3人帰る。昨夜はビバークとのこと。そうとうの疲労。

以上MORI記 (森正之<08>)

午後11時 高野池より下山(9時30分夜)、夕食をたべ やっとおちつく。森の作ってくれたラーメン汁は 非常にうまかった。(佐木誠<08>)

イチガツツイタチ イケハラモリヒコ(ハッキ)

まずは皆様 新年おめでとうございます。この山小屋で新年を迎えた4人(森、佐木2人、池原)のうち一人に この私が入りましたのはまことに喜ばしい。正確には 新年を迎えたのは 縦の木の下でした。火打アタック隊(?)の一人として吹雪きのなか ビバーク中に新年を迎えました。この小屋へは夜も9時過ぎに到着しました。読みにくい人の為、漢字・ひらがな&カタカナで書こう。僕もその方が書きやすい。(ココマデカタカナ)

森、佐木2人、そして私 池原の4人で高谷池火打へ行くという計画。マズ12月29日 佐木2人池原の3人 小屋へ入る。森の食糧も持っているためかなり重い。その上、岡田さんより漬物4kg程もらい 重い、重い。佐木2人、特に弟はシゴカレたくてたまらないヤツらしい。杉野沢からのリフトにも乗らずに歩くという。エライコッタ。僕もツキアッタ。「現役も歩くといい」。僕もシールを付けて歩くのはハジメテ。おまけにこんな重いザック

も、2年ほど かついでいない。ハテ モツカシラン。スキーで坂を下りるのはもう大分やったが、これは引力というデッカイ強力が呼ぶ方向に落ちるから よい。ところが この呼び声に逆らって登るのだからホネだ。ロッジまで来てバテる。弟佐木もシゴカレたのに満足して ここよりリフトに乗る。荷物は2回に分けた。2回目はリフト動かず歩いて登る。

30日：黒沢出合まで行く スキーは笹ヶ峰牧場に置いて ワカンで入る。5分の地図どおり歩いてえらい目にあう。雪はコシまでくる。後で分かったのだが、ワカンを着けて歩いた道は 新道より100mほど 山側に入ったところにあり バカを見た。WWVが新道をきれいにラッセルしてくれていたのだから。黒沢との出合いには 明日に備えてラジ旗を置いてくる。小屋には森が来て寝ていた。彼は悩むところあって、寝正月に決めたそう。明日 高谷池へは 佐木2人と僕の3人に決まる。それにしても この日の天気の良いこと。太陽は3月のように輝き なんともうらかな日であった。

31日：笹ヶ峰までのロードでバテぎみ。泣きたいのを我慢して黒沢との出合までつつこむと調子も整う。ただ 天候が気になる。風はないが雪は相当に降る。富士見平からは吹かれそう。WWVのトレースがあるので楽である。ここからはワップで登る。尾根上はモミの林で 雪が付いて非常に美しい。富士見平から又 スキーをはいて高谷池へ。予想通り吹雪、トレースも消えがち。地図・赤布を頼りに進む。高谷池間近の平原(?)でトレースは完全に吹き消され 赤布も見えず、4時、吹雪は激しくなる。視界もきかず ビバークすることに決定。モミの木の下へもぐりこむ。ガタガタ震えながらも6時頃より眠る。10時頃 風も止み食事。ラジオからはベートーベンの第九が聞こえる。12時に鐘の音が一つ二つ聞こえた。5時まで寝る。年越しのラーメンも食べた。まずは新年おめでとう。

1日：うまい具合に昨日より天気は良い。出発。火打には向かわず帰る。昨日の雪 かなりの量である。途中立ててきた僕らの旗の 大部分は見えず。天気は良い。日も出る。御来光である。パン！パン！天照大神様！パン！パン！ 富士見平より快適なスキー。モミの木とのキスはすばらしい。あの冷たさ、あのうまさ、雪のうまいこと、うまいこと。尾根もやせてきたのでワカンを履く。雪は深い。すぐ胸までくる、下りだからよいが 上りはどうする気か。尾根をはずれてからは、ワカンでは時間を食うのでスキーに替えて下る。さすがに早い、アツいう間に黒沢へ下りる。笹ヶ峰牧場の京大ヒュッテ(Y

WVのカンバン) 前には5時に着く。さて これからが大変である。エッチラオッチラ シールで歩く。トレースは無し。昨日の雪は深い。山小屋まで4時間かかったことになる。バテました。実に厳しい山でした。この僕、実は冬山は初めて、シールもワカンもはじめて、夏のビバークの経験も無し。つらくはありましたが、僕の冬山訓練計画の第1次第1回冬山入門(1)は、幸運にも大成功に終わりそうです。

スキーがどんなに強力な武器であるか YW 山小屋スキー 黒沢ワカン 富士見平スキー 高野池 高谷池スキー 富士見平スキー やせ尾根ワカン 途中スキー 黒沢スキー 山小屋

スキーをぬぐと、ワカンでは胸までくる雪がわずか膝下1cm?となる。早い。今度の山行でもスキーが無ければ高谷池へは行けなかったであろう。又、高谷池へは入っても、帰りにもう一回ビバークせねばならなかったろう。だが スキー2本は重い。

小屋には森が待っていた。山小屋へ疲れて着いたとき、親切な小屋番のおやじに会ったような気がする。我が家へ着いたのだ。森の作ってくれた飯のうまいこと。笹ヶ峰牧場から池の峯までの3時間、泣きたいあのつらさも もう遠い思い出。

(池原盛彦<08>)

昭和44年1月2日(木)

3時半 この山小屋の寒いこと、3時に目が覚めた。今は 雪は降っていない、というのは 小屋の中に雪が降っていないから。小屋内積雪量1cm、屋根の雪はすべて落ちたらしい。昨日 寝るときにはまだドサッ、ゴーとやっていたのが 今はまったく静かである。

今日から現役が入ってくる。ミナサー——ン ガンバテクダサイ。ザックかついで、シールを着けて、スキーが出来るようになったら、1月の火打も君達のもの。トレーニング訓練。僕のようにOBになってから始めないで、今からでも冬山を始めたら。

1969年元旦 終戦の年がニワトリ、今年はまだもう2度目。終戦の時を前後して生まれた僕ら8期の連中、皆元気です。今日2日、鎌倉で皆に会う。池原盛彦

今、森がパッと起きた。僕が「寒いな」と言うと、「ウー」と うなづいて また寝てしまった。4時45分 (池原盛彦<08>)

9時15分 これから小屋を去る。皆んなのこの小屋についての希望を、選択無しに書く。

1. スキー立て(入った右側)
2. 炉がじゃまだ

3. 便所 中に紙入れ。ランプ置き場。
4. 個室を作る（冬期用）。
5. はしご（二階に上る）を何とかする。
6. 天井 張ること（雪の漏らないように）
(森正之<08>)

—キザなやつ— (神大WV)

昭和44年1月11日(土) 晴れ

学校のスキー教室の帰りに寄る。スキーで第二リフトより来る。日が照って雪がとけたのか、スキーの滑走面に雪が着いて歩きにくい。小屋が雪につぶれているかもしれないという不安を胸に抱きながら到着。山小屋は立っていた。晴れて温度が上がったためか、南面の屋根には雪が無く、下に滑り落ちていた。小屋の中で 山小屋日記を読みながら 昼飯のパンを食っている間に、ドサー——と屋根の雪が落ちる。小屋に泊まる予定ではないので、もうそろそろ下りることにする。積雪は1mぐらい。

1月11日 午後2:30 (榎本吉夫<08>)

昭和44年1月19日(日) 天候 晴

神奈川大学 WV 国大山小屋偵察隊 渡辺、宮崎、猪俣、以上3名

雪積 約1.5m

上野 Sat. 10:59 田口 am 6:57 バス
田口 st 7:00 お宮前 am 7:20

お宮前より岡田さん宅にて状況を聞き、9:30分 小屋 向かって出発。林間コースのゲレンデに沿って歩く。まさに、ゲレンデにゲルの穴を1コ1コつけながら、申し訳ない、リーダー命令。11:20分、半分バテぎみながら到着。

偵察内容

1. 小屋までのアプローチ
2. 小屋の環境 (内外)
3. 小屋の環境の利用
4. スキー場 e t c

1) →未完成な小屋。外見は近代的な建築、板の間の上に雪が約3cm積もっていた。

2) →スキー場、広々としてゲレンデの人もまばら。雪質悪し。リフトも長くていいが、それに比例してリフト代も高い。

———感じたこと———

未完成な山小屋の物語。

早く一人前の小屋になりたい。温かい小屋でありたい、そう願うのです。この小屋へ泊まる人々よ、もし私を本当に愛しているなら、温かいストーブをそなえつけておくれ。夏に君達の運んでくれたマキが、小屋の中に在りさえすれば、きっと、君達の友達になれるでしょう。小屋のエントツから出る煙にむせびたいの・・・。

昭和44年1月20日(月) 晴

AM 7:00 温度 -5℃ 偵察完了。

9:00 出発。10時までスキー のち下山。

11:00頃のバスに乗る予定。これから林間コースを山岳スキーのみせどころ。ザックかついで、ニッカーズボン かつこいいとこ、見せてやる、とは言ったもののいささか心配。それでは 又来る日まで、お世話になりました。—AM 8:30分—
— 神大WV偵察隊 渡辺他2名。 (神大WV)

昭和44年1月27日(月)

pm2:00 書くものないのでマジックで書く。許せ。

1/26 一人で東京を出発。スキーがうまくなって、みんなにコーチ出来るようにというのが、最初の願いだった。その夢も泡と消えた。無情の雨、寒い雨が降るなんて、今年は異常気象だ。まあ、おかげで雪が滑らないので、楽に小屋に入れた。(第2リフトは止まっていた)。小屋に来てびっくり。ジャガイモ、タマネギ、ニンジン すべてベコンベコン。使い物にならん。食糧はあてにできない。1月上旬までしかもたず。神大さん、食べられる野菜はすべて食べてください。しかし、おれ、スキーそんなに下手じゃないのになあ。室温6℃、プラスですぞ、みなさん。ウシウシ。帰れなくなると困るから、早めに終わる。外はすごいガス。ベランダの雪下ろし、マイッタ。スキー靴はよく滑るなあ。作用反作用で押し戻される。ジャン。キリが晴れたよ。空には雲一つない。くつきりと妙高が浮かんでいた。

2:25 (高橋<08>)

昭和44年2月23日(日) 晴れ時々雪

稗田、高橋 積雪約1m(新雪約15cm)

10:00 山小屋着 一步踏み込んで、小屋の荒れ方におどろいた。小屋中ごみだらけで、土間もゴミだらけ。食べ残しや食器の汚れたものもそのまま。それにしても、もっと棚があったらなあと思われる。遅い2回目の朝飯か早めの昼飯かを食べてゲレンデへ。(中略…想像はつくだろうが、言わないところが おくゆかしいところ)昨夜の夜行の疲れも出て もはやグッタリとして小屋に帰り着くと、今度は夕食。カレーライス、終わってみると もう7時過ぎ。疲れのため早くもダウンと相成る。オヤスミナサイ・・・

昭和44年2月24日(月) 晴れ

朝、Tと、今日の午前中に 残りのナベ釜と食器をきれいにしておもうと思立ち、まず水場を掘り出しに行く。しかし、水場は大方凍り付いてしまって役に立たない。そんなこなしている、丹羽と榊原がやってきた。そして明日より神下が入ることを聞く。とにかく 4人となったのでまず一卓…とはならず、片づけを始める。ベランダの雪かきをやって(半分)バテる。岡田さんのところに女の子が3人泊まっているので、私としては男2人のやもめ生活を嫌い”セーノ”で 降りることにする。よって 今晚は彼一人で泊まることになる。

みんなと別れ、一人寂しくリフトに乗る。第2ゲレンデで大転倒、目から火花が出る。山小屋に着く、誰もいない。この山小屋は一人で住むには良いところである。まったく優雅である。飯をさっくり、カレーにした。風が出てきた。外をのぞくとシーンとして気味が悪い。化け物が出てきたら とびかかってやろう。

昭和44年2月25日(火) 雪

8時10分前 起床。飯を作って荷物をまとめ、9時10分 山小屋発。新雪を飛ばす? 9時50分 五八木荘着、荷物が重く息が切れた。皆は起きたばかりであった。バカよ。(真相は まだ寝ていたのでありました。どちらがバカでしょうかね?)

高橋

昭和44年2月26日(水) 小雪のち晴

一昨日来の雪で、多いところで50cmの新雪ができた。一夜にして、ラッセルが消えていた。山小屋はがらんとしていた。ずいぶんと住み良くなったと思う。

(高橋)

昭和44年2月27日(木)

朝着。人気の少ないゲレンデに 部員がまばらに散っている。まるで白砂糖に群がるアリのようだ。雪は重く、にぶく光る。俺は再び雪の中に来た。これが今の最上の所の様に。最高の世界の中へ、俺の刻んだ日々は、雪は一体何を意味するのか。しんしんと降る雪にそう問うてみた。

昭和44年2月28日(金)

雪は無言で降る。それがあたかも当然のように。それが、自然なのかも知れない。しかし 何かを答えて欲しい。雪は怒る、風を伴い、あたり一面に吹き付ける。今日もスキーは雪を切る。今降ったばかりの雪を、昨日降った雪を。

昭和44年3月1日(土)

雪はつかれたかも知れない。我々の若いハツラツとしたエネルギーに 純な愛と意欲に天の雪は しばし私達に問うことを止めた。若人の声は どこまでも ひどく垂れ下がった雪に ぼんやりと日陽す太陽に。今日の 今の世界がある。囲りの中に、なにもかもに 今日の命があり世界がある。俺はその世界の一端を見ることが出来た。それを今 自分の幸せとできる自分がうれしい。

昭和44年3月2日(日)

俺の意は雪にはねかえされた。俺の気持ちをこれ程までに雪に打ち込みながら 雪はそれを受け入れてくれなかった。雪の心は解っているつもりでも、今日の太陽は 俺をあざけ笑っている。まぶしくてしょうがない。

昭和44年3月3日(月)

卒業を前に 最後の合宿に参加し、もう 残すところ2日になった。一抹の寂しさの中に、過ぎた4年間が脳裡をかすめる。俺達の小屋もいつの日にか、部員の汗と涙の結晶としての小屋が出来てくれることを願い 卒業することにする。OBとなっても、できるだけ現役に援助することを誓って…。

昭和44年3月4日(火)

何もかもが 再び訪れることが無いであろう。今ここに
あるもから、全てにさよならだ。今は さよならに
さよならしたい。

昭和44年3月6日(木) 晴 無風。

妙高・戸隠 遠く魚沼・谷川と思しき山々の眺望絶好。
本日より、大森・二村・伊藤・山川・北村(秀)・左藤・
江川・桐生・秋野の計9人。何とぞ宜しく願ひいた
します。

本日の行動 田口着 6:57-杉野沢・駐車場にて簡
単なスキー練習(リフト)国際ロッジ前にてスキー練習
(約1.0時間)-(第1・2リフト)第2リフト降馬着 13:00
-(スキー)小屋着 15:10

備考:第1,2リフトはザックを後から乗せて上げる。
我が部の心の故郷”妙高なえな小屋”に、重労働を強
いられて着いたとあれば、如何にボロ小屋(イヤ、飛
んだ失礼、しかし戸を開けて先ず目につくのが土間の
雪とあらば、ついこの言葉も)といえども、心身共に
安堵を覚えるものです。今日は未だ生まれて一度も
スキーをはいたことのない者が二人もいながら、全員
に可成り重い荷物をしよわせ、全て行動をスキーでや
った。さすが全員バテ気味で到着したが、今 これを
書いている時、皆は元気を回復し、明日の自分のカッ
コ良い スキー姿を夢見て、安らかな眠りにについて
いる。先程 外に出たとき、外は 月の醸し出す、純白
の詩の世界であった。明日もきっと 良い天気だろう。
ではおやすみ。 (大森)

昭和44年3月7日(金) 天気 晴後曇 風弱し

昼前までクラスト状であったゲレンデが、午後にはベ
トベトになる。

6:30 食当起床

8:10 前日 荷物が多すぎ 野菜を買いだしできなかつたため、伊藤・江川の両名を 杉野沢に送る

9:00 山小屋出発、スキー練習(ボーゲン)

12:00 山荘笹ヶ峰にて昼食、買い出しの両名 戻るが、伊藤さん、山荘を目前にしてスキーを折る

12:30 スキー修理のため伊藤・大森、杉野沢へ下る

15:30 スキー自由練習を終わり、山小屋帰着

18:15 夕食(大変オイシイすき焼き)

21:30 就寝

行動の反省:全員まだまだスキー技術の向上はほど遠
いが、二村・左藤の二人は目に見えて上達している。
僕(大森)がコーチ役を引き受けているが、なかなか
難しいものである。夜はブラックニッカー本を空け
てしまう。江川が少々吐いてしまった。あとは全員気

持ちよさそうであるが、この寒さを考えてみれば ち
よっと無謀であった。”難しきはリーダーなり”、つく
づく感じる。 (大森)

昨年11月18日付けの長谷川の人物評を読んで、全
く寒々とした感になる。かくも人を見る目に悪意を持
った人間が居るとは。書かれている一人としてコメン
トを付けさせて貰う。この 永久に残るものであるから。
私は バカ であるという。確かに私はバカなこ
とを一つしたと自覚している。さわらぬ神にたたりな
し という。私は、彼、長谷川を正常な人間と思い、
やたら 人を敵だ々と騒いだり、協調性(良い意味
での)をぶちこわそうとするのを、直してやろうと気
を遣ったものであり、挙げ句の果て、なすすべなく、
ショック療法として、ビンタを喰わしてやった。全て、
逆に、悪意にとられたようである。狂人を相手にする
事は、フリーになった今、とてもそうする気にはなれ
ぬ。次に、ワングル埋没主義者であるという。私は ワ
ングルに全生活を向ける程愚かではない。ただ当然の
こととして、主将の義務を果たしただけの事。即ち、
それ故、埋没主義というなら、主将という任務の大変
なことを察するのが正常人の考えるところ。次に 個
人主義 という。英国で育てられた本来の意味の個人
主義は、民主主義と表裏一体のものである。個人を尊
重する部風は、国大ワングルに脈々としている美風で
ある。日本語の使い方を知らぬ男が、個人主義と利己
主義をとりまちがえていると考えてやろうか。その事
なら、私と共に汗してきた、3年の連中始め、知人
ぞ知る。言うまでもなからう。容量合理主義 とは、
木で鼻を継ぐ如く、チグハグな混成語だが、私は、合
理的に物事を運ぶべき時には合理主義者である。最後
に、嘗て私は一度として、女の尻を追っかけた事はな
い。口でふざけたことを言ったとしても、単なるフザ
ケに過ぎぬ事位、誰でも解っていてくれよう。私をフ
ェミニストであるとするなら、同時に、それ以上にマ
ンニスト(男性尊重主義者とも言おうか)である。
なんとすれば、個人は尊重する主義であるからである。
山小屋でこそこそと、他人の中傷文を書く様な卑劣な
行為などするためのノートではないんだ。貴重な頁を
何と思っているのか。

(伊藤)

昭和44年3月9日(日) 晴後ガス立ちこめ

る。風弱し

食当 6:30 起床。今朝は昨朝よりは暖かかったが、
それでも 8:30 で零下6℃である。キジ撃ちに下の方
へ行ったら、確かに皆に言われた様なゲレンデ状の雪
原があった。ここをキジ場にしたことが悔やまれる。
9:10 小屋出発。いつものゲレンデでスキー練習。斜
滑降からシュテムクリスチャニアまで。山川が最も上

達したようである。ゲレンデは朝は凍って、陽が高く
なればベトベトになる最悪のコンディションである。
どうも怪我人、病人が続出して弱った。山川が軽い捻
挫、北村が筋違い、丹羽が軽いカゼ、そして今日は江
川が突き指をする。ゲレンデだけではなく、コーチの
指導もあまり良くないらしい。午後からはベランダの
雪下ろしをやる。床の上の雪は重みで氷になったらしく、
厚さ3cm程度に固くなって、難渋させられた。この日は
雪降ろし作業は予定していなかったが、相次ぐ怪我人の
為、突然のことであったが、結果的には13:00頃
から、濃いガスが立ちこめ、とてもスキーを
やれる状態ではなかったのであった。

(大森)

昭和44年3月10日(月)

一日中、ガスりっぱなし。時々風雪気味となる。

今日は全くガスが1日中ひどく、午前中いつものゲ
レンデで基礎練習、午後は下の方へ下って、自由練習
を主として行った。ガスは梢に並んで柱状に見事に着
き、霧氷となって今までとは異なった風景に周囲を変
えてくれた。ガスが腫れると霧氷で彩られた林が姿を
見せる。しかしゲレンデの視界はひどく、20-30
mも離れると人影も定かではなくなる。伊藤さんが
これではこのスキー場も流行らないと言っていたが、
尤もなことである。今日は江川が帰った。全員ま
だ元気である。今頃になって漸くスキーの油が乗っ
てきたらしく、盛んにもう1週間居たいなどと言う。
夜になって急激に冷えてきた。もう明後日は下山日
である。1週間といっても実に短かった。全員よく焼
けた。メガネザルが何匹も誕生した。これでは学校へ
行きづらいついて、皆、心底からぼやいている。

(大森)

昭和44年3月xx日(x)

高橋、榊原入山 3泊する。これでスキーをする
のも最後と、毎日毎日最終リフトまで滑る。おかげ
で毎日、下から小山まで歩き、俺のスキーも立派に
なった。板も腕も。なんせウェーデルングすっ飛ば
せるのだから。ゲレンデシュプレングもお手の物。
ああ！ここまで何回転んだことか。ケツを腫らして
泣いた夜もあった。スキーはスピードが生命である。
そろそろこのゲレンデも飽きたので池の平へ行く。
安いリフト。(1日分600円)。これまた最終まで滑
って小屋まで歩き。バスの接続が悪い。最終日、
OBの池原さんたちが入山、会う。おしるこを残
して下山。このくやしさを。6/11記

昭和44年3月30日(日)入山 雨後ガス

メンバー 岡本幸雄(*), 諸角 壮次, 同綾子 以
上5期 and 平井紀子(*?!)

何年ぶりのニコヨンで男性群はヒー、ヒー、ヨ
タ、ヨタ。彼女に良いところ見せなきゃなら
ない岡本氏はつらいね。年はとりたくないもの。
第2リフトまで乗り継ぎ、降りたところで視
界5m。ガスにまかれ、さて小屋はいつくぞ
!!ウロウロ捜しまわること2時間にして、
ようやくたどりつく。夕食(飯・キャベツの
ミートソース煮・キウリ、レタス、ハッ
サクのサラダ・ササガキゴボウ・京菜の
塩漬け・その他)

(諸角綾子(5))

昭和44年3月31日(月)快晴

8時起床

朝食(大根、油揚げ入りオジヤ・ヒジキの
佃煮・ササガキゴボウ・フキの佃煮・たく
あん漬け・その他)後、スキーをしに出掛
ける。リフトは昨日で運転中止。ゲレン
デを杉野沢まで降り、歩いて登る。今日
の仕事はコレで終わり。ほとんど人の居
ないゲレンデの真ん中にボコボコ穴を
明けながら登る。頭の上には太陽がギ
ラギラ、1年分の日光浴。

昼食、あべかわもち、その他。

夕食、スパゲッティミートソース、
その他モロモロ…。10時就寝。

(諸角綾子(5))

昭和44年4月1日(火)

8時起床 晴後くもり

朝食 飯・ジャガイモ、油揚げのみ
そ汁・ワカメのシラスあえ、その他…。

昼食、Fパン・バター・紅茶…の後、
第3リフトの上まで歩いて登る。そこ
でひとやすみ。そして小屋まで直
カル。終わり。雪悪し。

夕食、飯・じゃがいものスープ煮・
サラダ・その他…いっぱい。その後口
の中に入ったもの、プリン・じゃが
いものホイル焼(バター)・ウイ
スキー。

(諸角綾子(5))

昭和44年4月2日(水)雪

8時起床 さて、今日は最終日、何を
しよう?!

(諸角綾子(5))

待望の小屋ができました。やっと機会
をつくりやってきました。胸をワク
ワクさせながらその第1印象は…
外観は素晴らしいと思いますね。
内部は住み難いですね。便所の匂
いがするし、土間はグチャグチャだ

し、物置が無いし、でも、そんな文句はやめましょう。だんだんに素晴らしい小屋にしていけば良いのですから。ここまで作ってくれたOB及現役諸氏に感謝します。これからもたびたび寄らせて頂きます。

この小屋の使用法をどこかに書いて置いて下さい。例えば 水場、石油や炭を使った後の処置（金を払うのかな）。生ゴミは必ず外へ捨てていく、など。後から来た人がメイワクしないよう 最低線を決めておいて下さい。

1日1回だけ外に出てスキーして、あとは食って寝ていました。静かな山の静かな小屋で大変満足しました。いつかここで 同期会でもしたいものです。OBはなかなか 小屋があっても来られないらしいですね。落成式と正月と今回で まだ3回だけのようである。現役諸氏の名前は沢山書いてあるけど、顔を知らないので残念です。では又、また来る日まで サヨナラ。
(モ) (諸角壮弐05)

昭和44年5月1日(木) 快晴

OB 井上(3期)、森 入山 天気快晴 雲一つ無し、あと2日くらい遅れてくれればよかった。ぶらりぶらりと 過ごすに もったいなさ過ぎる。雪 ほとんど無し、すっかり春。妙高、火打をねらうに絶好の機会、笹ヶ峰も雪無。

池の峰まで散策。池の峰よりの妙高はちと 変わって見える。小屋の近くに水芭蕉咲く。(井上(3期))

昭和44年5月2日(金)

早朝 森、高谷池、火打にむけ出発。井上は大谷ヒュッテより妙高を目指す。

なえな小屋5:05-6:05池の平分岐6:10-大谷ヒュッテ6:35-6:55尾根とりつき7:00-8:15妙高山9:05-長助池9:45-10:20大谷乗越11:30-12:15高谷池12:30-13:35黒沢13:55-14:25笹ヶ峰14:30-15:50なえな小屋

渋谷橋を渡り、左の林道(通称 弾丸道路)を行く。池の平分岐までは広い道。大谷ヒュッテを過ぎると、一面 雪となる。僅かトレースあり、人影全然なし。快晴にて、妙高からのながめは最高。小屋の赤い屋根もみえる。長助池への下りはトレース無し、ただ斜面を下るのみ。大谷乗越への上りも同じく見当を付けて直登。高谷池で森と再会。彼は高谷池どまり。小屋にもどれば、吉野(2期)、跡部(4期)、郡司(4期)が来ていた。(地図あり) 井上(3期)

19690503(土) 快晴

吉野(2期)、井上(3期)、跡部(4期)、郡司(4期)で妙高山めぐす。

なえな小屋7:25-8:05 休8:20-9:00池の平分岐9:15-9:45大谷ヒュッテ(跡部、ここでダウン-何せクツが新しいもので)10:00-10:25尾根とりつき10:35-11:10(休)(森と出会う)11:20-11:45妙高山13:45-大谷ヒュッテ14:30-14:45池の平分岐15:10-16:00なえな小屋 (井上(3期))

快晴 田中、藤田(日本冶金)入山 小屋まで殆ど雪なし、小屋は皆 出払って 人影無し。10時着。のんびり休憩した後、笹ヶ峰に向かう。連休で列車が混雑したため 疲れがどっとでる。笹ヶ峰にて昼寝。3時半に目覚めて下る。足が最高にだるい。小屋に帰ると、森を始め OB連中がすでに下山、跡部氏がビール7本、杉野沢より買ってくる。夜食はジンギスカン料理(1kg)とビール。飯1升5合、OBは豊かだなあ。(田中)

昭和44年5月4日(日) 快晴

田中、藤田 笹ヶ峰より高谷池へ出発。途中ベタ雪の中を進み、何とか高谷池に着く。昼飯を食って 火打ピストン。夜食はタマネギのみそ汁に鯨の缶詰。8時前に就寝。(田中)

昭和44年5月5日(月) 快晴

4時30分起床。長助池まで快適。妙高に9:30着、昼飯 コンデンスミルクでアイスクリームを作る。雪を入れすぎて味が薄い。毎日 快晴で申し訳ないくらいだ。天気予報では4日、5日と崩れるはずなのに、下りは雪の中をガタガタ下り、12時に大谷ヒュッテ、1時55分小屋着。藤田君、杉野沢へビールと肉を買いに下る。昼寝をしているうちに 彼が帰る。夜、すき焼きにビール6本(3人で)、うまいみそ汁。最高の気分で眠りにつく。(田中)

昭和44年5月6日(火)

森、田中、藤田 下山。温泉に入って すっきりしていく予定。(田中)

昭和44年6月11日(水)

バスで入山。6/1よりバス運行中。妙高に雪無し。昨日、昼に起きているので、夜行の鈍行じゃ眠れないだろうというので、急行にする。ああ、これが失敗。軽井沢あたりまで混む。小諸で鈍行を追い越したが、

向こうの方が空いている感じ。杉野沢でバスを降りた。岡田さん宅、工事中。田植えに來なかつたので、何としても工事は手伝わなくては。山小屋の整備と併せてやろうかな。妙高に雪が無いので、いささかガツカリしたが、火打にはまだ スキーが出来ると聞いて喜ぶ。雪のないスキー場を見る。なんとなくおもしろい。あそこで曲がって…あそこで力を入れ・・・なんて思い出される。小屋に着いた。なんか、でっかくなつた様な気がする。荷をほどいて、早々に出かける用意。約10分歩いてから、ポリタンを忘れた事を思い出す。あわてて小屋へ。水場へ。ありやありや。オタマジャクシがいっぱい。この水、飲めるか。まあいやと水を入れる。今日は、三田原への直登を開拓しようと思つて出発。しかし、暑い。結果はダメ。体力不足と、水が悪い。吐き気を覚えて引き返す。話によると、4月頃迄はスキーで三田原へ登れるそうだ。そして、近い将来、三田原にロープウェイが出来、大滑降ができるそうだ。吐き気、治まらず。こりゃ、お茶を飲まないとダメだなと帰ってから湯を沸かす。4時頃から、メシをつくりだす。食欲減退。井戸にナベなど洗いに行く。今度はママシ。こりゃダメだ。小屋に鳥が巣を作つたようだ。南の窓付近。7:30まで、外でボサツとする。一人で今日も寝る。(高橋)

昭和44年6月12日(木) 雨

前夜、寝られず。1日中寝ていた。外は雨。明日に期し 7:00に寝る。(高橋)

昭和44年6月13日(金)

4:00 起床 5:00 出発 山小屋-池の平分岐-大谷ヒュッテ-8:00 妙高山頂-長助池- (バテ気味) 9:00 大谷乗越-黒沢池-高谷池 10:00-火打山 11:05-高谷池-黒沢-1:25 笹ヶ峰=2:05 山小屋

一人で居ると食事がうまくつくれない。メシはいいや、とか、もうイヤ で軽くやってしまう。それゆえ、体力不足。ああ！下へ降りたらビールが飲める。

(高橋)

昭和44年7月6日(日)

森、他2名入山。梅雨前線中部日本停滞、終日ガス。妙高に向かうが、池の平分岐で引き返す。工事中に付、通行禁止。二人の番兵がいて追い返される、頭に來た。

(森)

昭和44年7月7日(月) くもり

今宵は七夕ならむ。くもり、天気は下り坂。高谷池に向かう。本日下山。(森)

昭和44年8月4日(月)

すでに8月になっていた。入山5日目。入山以來天気悪く、毎日雨。時には風強く、時には雷鳴なる。前線が北上したと思つたら台風7号、今宵上陸とのこと。会社の休暇も今日で終わる。(森)

1日 黒沢直登-黒沢池-高谷池-笹ヶ峰。花の季節はすでに終わっていた。7月始め、あんな見事であつたのに、目に付くものといえば、ヨツバシオガマ、ハクサンフウロウ、ウサギギク、クルマユリ、等々、ちょっとさびしい。黒沢はおもしろくない穴だ。全てダイレクト。シャワークライムシフオールあり。黒沢池の実際は見事なもの。縦走路から見えるのはほんのオサワリ。

2日 戸隠に向かうが登らず。キャンプ村から、野尻湖回つて帰る。終日雨。戸隠はつまらない所。

3日 晴れ間が見えたので 再び高谷池に向かう。火打の頂上から白馬が見えた。日曜日、池の畔に、テントがいっぱいあつた。夜、花火大会。東京で買つてきた100円。燃えかすが灰になって、雨上がりの冷たい大地の上に落ちた。紫色の煙がガスの中に流れていった。赤い、細い柄の思い出が淋しすぎるので途中でやめた。

4日 タベの強風雨もおさまつて、今朝は卷雲の舞う秋空。こんなにトンボが多いとは知らなかつた。蝶々もウグイスも、ヘビもトカゲも、動き出した。動き出した。洗濯したら、天空にわか曇つて、土砂降り、雷鳴とどろく。

月例の剣に行くつもりであつたが 休暇とれず、金の無さも手伝つて、手近な小屋に入ってしまった。入つてしまうと、出られないもの。これで社会生活に復帰する精神状態に回復するには、大分かかるだろう。蝶々がランプの灯に寄つてきて、俺の手に留まつて一生懸命寝てしまった。

昭和44年8月5日(火) 雨

朝から滝のような雨、一時も休み無し。何か恨みがあるのだろうか。(森)

野田一夫(11)、丹羽守裕(11)、山下久男(12) 昼入山。森さんが小屋の中に転がっていた。丹羽に文句を言われ、早々と下山していった。(のだ)

昭和44年8月6日(水)

杉野沢に食料買い出しに下る。小屋に戻ると 高橋、桜井が来ていた。丹羽君が頑張って、井戸の水を全部掻い出した。腰が痛い痛いと言っている。あいつはもうダメだなー。夜、すき焼きとビールで宴会。

(のだ)

昭和44年8月7日(木)

朝、榊原入る。杉野沢に下り、ガスコンロ2台購入。ガス台も出来た。便利になったなァー。ばら氏が釘箱を作る。昼、丹羽 下山。夜、又ビールとすき焼き風野菜炒め。5人でトランプをしていると、下からエールが聞こえてきた。皆、ナタやスコップを持って身構える。長谷川の声「女の子が二人来たぞー」あわててナタ、スコップを隠す。村田さん、長谷川+♀×2 入山。

(のだ)

昭和44年8月8日(金)

台所のスノコを作った。(桜井氏の力作)。バラ氏が道具箱を作る。高橋、山下 下山。村田氏、長谷川君と笹ヶ峰に行く。往きは工事現場に行くトラックに便乗。帰りはロード。長谷川君がムキになって飛ばした。ばかだなァー。それを必至になって追いかけた俺達もばかだなァー。武庫川女子大の小屋に寄ったが誰も居ない、来ないかなあ。(のだ)

昭和44年8月9日(土)

村田尚雄(10)、桜井謙一(11)、榊原福司(11)、野田一夫(11)、長谷川

8時起床。桜井、榊原 12時下山。1日中雨、何もすることなく、寝て過ごす。夕食、卵焼き、ナス炒め、イカ缶詰、フキ煮付け。

野田君曰ク「男3人では、まともな話しかできない。身も心も疲れた。女の人に来ないかな。」

長谷川君曰ク「俺にはまともな話は出来ない。それかといって、エロ話もできない。贅肉が体中に のさばる恐れを感じつつも、寝るより他にすることなし」

村田君曰ク「早く天気が回復しないかなー。天気の回復と共に、妙高に登るんだが」 (村田尚雄(10))

卒論の勉強でもしようかと思って、山小屋へぶらりとやって来たが、山の中に来てまで、下界のことに頭を使うのは阿呆らしく思える。(毎日、着々と慌てず、焦らず勉強している僕にとっては、4、5日の空白など恐れるに足らず)。山小屋の柱1本1本にも愛着を

感じるのは何故でしょうか。執行部のメンバーであった山小屋建設当時に、とりわけ、何かをやった憶えもないのに。時間は山小屋建設当時の不愉快な出来事を全て消してしまったのかもしれない。過去の不愉快な出来事を、柱1本1本に刻み込みたいと思った僕の心は、どうなったのかな。みんな忘れてしまったのだろう。時間と忘却は、人間に希望を持たせる唯一の原動力だと思います。(村田尚雄(10))

昭和44年8月10日(日)

岩崎君の一行5人、入山。岡田さんより薪5束届く。これで当分、食いつぶぐれないで済むぞ。杉野沢に下る。公民館の庭でブランコに乗り、トンボを追いかける。大の男2人そろって、こんなことしか出来ないとは。(のだ) 明日は火打に登る予定。

(野田一夫(11))

昭和44年8月11日(月)

朝雨、肌寒し。せつかく登る気になっていたのに、ついていない。ここに来てから今日で、1週間目。毎日のように雨に降られている。涼しいし、空気は良いし、飯はうまいし、なかなか帰る気にならない。

フェリス2名入山(森、長尾)

(のだ) (野田一夫(11))

昭和44年8月12日(火)

火打へ出発。天狗の庭はスバラシイ所。火打をピストンした帰り、雪溪の雪をとり、北側の斜面をトラバースしているとき、向こう側の岸壁が大音響をたてて崩れ落ちた。カックイー (野田一夫(11))

昭和44年8月13日(水)

薪作り。杉野沢に下り、棚材料の催促に和信へ行く。(野田一夫(11))

昭和44年8月14日(木)

須藤さん、西岡 入山。黒姫登山に出发、高沢のバス停で1時間以上待たされ、登高意欲を無くし、リフトの一番上、見返り坂からUターン。下りはワラビを摘みながらチンタラチンタラ。夜は花火大会。

(野田一夫(11))

昭和44年8月15日(金)

岩崎君一行5名様とフェリス2名様下山。俺も今日で11日目、金もなくなったし、食糧も残り少な。まだ帰る気はしないけど、思い切って下ることにした。

(野田一夫)(11)

10日の朝 入山してから6日目、ついに今日、下山することになりました。クラスの”理論合宿”と内外にふれこんだのですが、それらしき気配は全くありませんでした。でも そんなことは 誰でも分かっていたので、むしろ、予定通り行ったという感じです。高橋さんが11日くらいまで居ると 聞いてたのですが、来てみると村田さん、野田さん、長谷川といった、ワンゲルでも変な人間の多いとか、とかく噂のある、ワンゲルの、更にもうその中でもユニークな存在として注目をあびている方々と一緒に過ごすことになったのは、クラスの合宿の内容が 既に決定された感すらありました。殆ど毎日(4/6)レッドとニッカを飲みました。家に帰って親父と2人で、毎晩ウィスキーを飲んだら、おふくろはどんな顔をするやら。最初の10,11日は雨に降られてしまいましたが、普段の善行のせい、それ以降は殆ど晴天でした。山は12日に国大ワンゲル、フェリス短大ワンゲル、旧分校経済3組で、どうして顔を合わせたかは、偶然としか言いようがありませんが、高谷池を通過して 火打山に登りました。14日にも 黒姫に登りましたが、ピークには到達しないで、one pitch で昼食をとった後は、”黒姫山”のワラビを採ってきました。村田さんも言っていました、国大生全員に この山小屋を利用して欲しいと思っています。個々で行った有効労働は 薪を作ったことと、山小屋の宣伝のために、入口にもう一つ指導標を作ったことです。これで山小屋宿泊費はどうにかならんじやないか、という希望的観測もあるのですが、どうなるのでしょうか。村田さんが居てくれたこと、フェリスの敏子さん、礼子さんが、11日に入山したこと等で とても愉快に過ごすことができました。今日、この山小屋を立つことになりましたが、もっともっと居たい気持ちです。野田一家の重鎮 岩崎敏昭君。

須藤さんと火打に登る。快晴。遠くに日本海が見える。ライ鳥の親子3匹、火打山頂近くで見える。山は緑、空は青、雲は白。少々疲れたが、全く素晴らしい一日でした。 安藤君入山。 (村田尚雄)(10)

昭和44年8月16日(土)

須藤昌博(8)サン、村田、安藤貞利(11)

9時起床、須藤サン、安藤くんは、スキー場を越え

て大谷ヒュッテへ行く。私は留守番、棚を作る。昼過ぎ、女性二人小屋を訪れる。ブスだったので、西瓜を食べさせて追いかえす。夜は可成り冷え込む。今日で山小屋へ来てから10日目。

(村田尚雄)(10)

14日から盆休みを利用して 始めて小屋に来てみました。僕は尾道の向島工場に配属されており、この小屋に来られることは殆どあるまいと思っておったのですが、6月から半年間、研修の目的で、大阪本社の方へ出張となり、ちょうどこの機会だと思ってやって来ました。小屋もさることながら(多分、予算等の関係もあった不備なところもありますが)周囲の山々の素晴らしさに久しぶりの山行を心から楽しめました。ワンゲルには、卒業後全くご無沙汰で、小屋に入っても知らない人ばかりかなと 心配して来たのですが、幸いに、野田君(11)、村田君(10)、安藤君(11)と逢えて、思い出話をしたりして、楽しい毎日を過ごしました! (須藤昌博)(8)

14日 入山 (PM 11:00) 付近散策&静養(晴)

15日 村田君と火打へ、村田君がお弁当を持ってくれたおかげで、全くのから身で、それでも 久しぶりで 慣れないせいか、はじめ身体がだるく、手がむくんでしょうがなかった。これも年のせいかなと思う。次第に調子が出てきて、高谷池付近の素晴らしさ、火打頂上での絶景に、つい、オッチョコチョイが出て、焼山の鞍部の雪渓に遊びに行き、おいしいシャーベットを食べたのまではよかったのですが、帰りの下りには膝がガタガタといいだし、腰がいまにも砕けん思いで、這いつくばって来ました。又、ロードに出てから、笹ヶ峰から小屋までが長いこと、途中ヘビに石をけ飛ばしたところ、一年生の時から愛用の登山靴の底がきれいにとれてしまい、その後は3cm差のビッコで、腹は空くし、腰は痛いし、とんだ目にあいました。でも結論は、”大変素晴らしかった”の一語に尽きます。帰ったら安藤君が入っており、ご飯を作って置いてくれたので大助かり、それでも まずは駆けつけ三杯と、ビールで喉の潤滑をはかり、味覚を大切に食べました。就寝9時。(天気、朝 快晴、昼 まばらな薄いガス流れ見晴らし悪くなる。夕、ガスが層を成し下がり雲海をなす。夜、星がたくさん見え、気温は下がる) 16日 安藤君とスキー場散策の予定で、妙高登山路に行く。昨夜、早く寝たのですが、起床が9時になってしまい、結局、出発は12時になってしまった。でも、要の所でイッパイ作業をしているとのことで、通れないということだったので、気持ちよいところで昼寝でもしようと思かけたのですが、ところが、ハッパも盆休みで行けるとのことでも、もう時間が中途半端で、それじゃ地獄谷の温泉のところを沢沿いに詰めて、

一風呂浴びようと目論んだら、火山岩で脆く、詰められず、これも諦め、大谷小屋まで上って、戻ってきてしまいました。この日も昼からは ガスが立ちこめ視界が悪く、野尻湖は望めなかった。(天気、昨日と全く同様、ただ昼のガスはちょっと濃かった、夜は昨晚より冷え、たき火をしてあたりながら流れ星を探した・・・ついでに、はじめ赤い尾をひき、その後緑色に包まれ消えた流星を見た)

17日 起床7時、安藤 峠ごえで中土に向かう。ニコヨンをしよって村田君は留守番で、僕は一人で黒姫に行く。杉野沢の橋から黒姫高原経由黒姫行バス10:50 発。地図には載っていない(失礼 僕はハイキング地図で行ってしまい、ここいらに誤算があったようです) 小泉コースというのがあったが、表コースを通ろうと思い 出かけ 国鉄キャンプ村を経て行ったのですが、このコースは、最近余り使われていないようで、ブッシュがひどく、青い太いやつが とぐるを巻いていたりして 肝を冷やした。従って 表コースに入るにはシャレーから真横に太い道を行って、御鹿池の下を通って入った方が良いように思われます。それよりも多分、小泉コースの方がしっかりしているようです。ともかく、から身同様だから、直登コースの方が早いと思って行ったのですが、雑木が深く、見晴らしも悪く、暑いし、一人であせってくるのですが、結局、帰りのバスのことを考えて、六合目でダウン。全然取り柄のないワンダリングでした。それでも、帰りには、野ウサギの子供(好奇心の強いところを多分子供であろう) がチョロチョロと顔を出してくれ、それだけが救いです。牧場が近くにあるせいか、アブがうるさくつきまとい、それを追っているだけで息が乱れてしまう。 帰りは最終が 5:30 杉野沢、高沢行(橋のそば) でしたが、4時にシャレーに着いたので、杉野沢まで歩いて来てしまいました。杉野沢は、びっくりしたのですが、意外に物資が豊富で、魚などもたくさんありましたので、アジとイカと泥のついたとろろ芋を買って、10日も入っている村田君にごちそうしました。(といっても、作ってくれたのは村田君で、何しろ杉野沢から小屋までは上りで1時間以上もかかるのですので、僕は着くなりダウンでした。) とろろ芋は手近にあったトタン板を釘でたくさん穴をあけ、下ろし金にして、酢醤油で食べ、非常にうまかった。

(天気、昨日と同様、夜間の気温は少し暖かくなった) 以上、明日でもう帰ることになりましたが、非常に楽しい4日間を過ごしました。今後、来られる機会がいつになるか解りませんが、ぜひ又来たいと思います。OB先輩へ OB合宿が今後あると聞きました。勝手な都合でご無沙汰して、勝手に山小屋を使って、申し訳ございません。どうぞお許し下さい。現在、大阪におりますので、嘉納さん、諸角さん、岡本さん等と connect とっております…この様な走り書きで沙汰を繕い申し訳ありませんが どうぞお元気で。

昭和44年8月21日(木)

岩崎、村田、桐生、望月 入小屋

鳳凰三山に行くつもりであったが、台風接近のため、横浜駅で相談の末、山小屋へ行くことに決定。上野1002の白山に乗車、急行に乗ったのに、席に座れない(国鉄当局を弾劾せよ!) 1532 田口発、山小屋 1630に山小屋着。杉野沢で村田さん、岡田さん宅に寄る、我々より1時間遅れて着く。その間に我々はおにぎりを食べる。村田さんは鉄研の人を連れて着く。鉄研が国際ロッジ近くで合宿中とのこと。(岩崎)

昭和44年8月22日(金)

村田さん一人を残して三人で黒姫に登る。僕にとってはリターンマッチ、二度目のアタック。面子にかけてもといった感じ。一度目は気の毒がられて、二度目は笑われて、三度目は馬鹿にされるとか聞いていたのだから。前回の斗いを批判的に総括して、高沢からバスに乗ったのが悪い と思って、黒姫高原まで歩くことにした。「見返り坂」までワラビが目について仕方がなかったが、その後は ただひたすらにピークを目指す。見返り坂 過ぎて雑木林の 風の全く来ない心臓坂に登り終わると、望湖台に到着。そこからは山を巻いて分岐まですぐ着く。分岐からは登り、30分ぐらいの登りを過ぎてからはロマンチック(?)な林と泉の中を歩く と言った感じ。木暗き道を過ぎると眼前が明るくなり、背の低い笹原が開ける。昼寝をしなければ馬鹿だ と言いつつ 馬鹿でしかなかった。そこから500m行くと大池と言って B l u e Shatoe(?)でもあり そうな静かな池がある。写真機を持ってこなかったのが悔やまれる。もう1600の杉野沢発のバスには乗れない。誰かが「四年生は食事の用意がしたいのヨ」との意見に暗黙の賛同。山小屋着を600に目標して急いで下れ。望湖台からは発電所に向けて下る。新ルート開発の意欲に燃えて発電所を杉野沢まで direct で降りようとしたときに、上から「ジープに乗って行かないか」の声に杉野沢まで便乗することになった。杉野沢から歩いていったら700過ぎになってしまう、と思っていたら、うまい具合に乗用車、ヒッチハイクで山小屋に到着したら、村田さんが夕食の支度をしていてくれた。

course&time 起床720 山小屋発 830-850 五八木 900-925 杉野沢-935 高沢-1015 黒姫高原 1025-1120 見返り坂 1130-1115 望湖台 1225-1300 分岐-1315 昼寝 1345-1425 池-1430 大池 1450-1550 望湖台-1640 発電所=杉野沢=1810 小屋

昭和44年8月23日(土)

朝から台風の影響で風雨共に強い、と言うほど強くはないが、とにかくずっと降られた。T. Iwasaki 記す

昭和44年8月24日(日)

村田、岩崎、桐生、望月

9時起床。桐生下山。昨日とはうって変わって、爽やかな青空。

13:05 の笹ヶ峰行のバスに乗り、高谷池を目指す。高谷池は深い霧に包まれ、視界悪し。高谷池のテンバは非常に良い。水場は近いし、地面は柔らかく平である。6時過ぎると冷え込みが可成り厳しい。寒くて、夜遅くまで眠ることが出来ない。明日の行程を考えて、無理してでも眠ることが必要、それ故 シュラフの中で寒い寒いと思いながら 目を閉じていたら いつの間にか眠り込んでいた。

村田尚雄(10)

昭和44年8月25日(月)

村田、岩崎、望月

望月 高谷池より笹ヶ峰に下る。8:00に岩崎と2人で 火打、焼山をめざす。火打までの登りは快適。後方に妙高、前方に火打、左手に黒姫、高妻山、右手に日本海と素晴らしい眺望である、高山植物が時期遅れとは云いながらも処々方々に咲いている。緑の中に黄、紫、白と素晴らしいコントラストを成し、僕の目に相当の運動を強いる。高谷池よりワンピッチ 55分で火打山頂に着く。火打から焼山までは走るようにして下る。途中 急な下りがあり、岩崎二度転ぶ。彼は重いザックを背負っているせいか、周囲の景色を見る余裕がないようである。僕はサブザックでヒョイヒョイと軽快に下る。火打と焼山の最低鞍部まで、火打山頂よりワンピッチ 1時間。焼山の登り400mは思ったほど厳しくない。途中はイチゴがたくさんあり、それを食べながら登る。道は、火打山の道に比べると 少しばかり荒れている。全くつまらない登り。焼山山頂は火打とは全く違った山肌をしている。火口は岩で覆われ、一カ所だけ岩の間より水蒸気を噴出しているところがある。火口底には水色の水が溜まっている。多分 硫黄を含んだ水の色であろう。鞍部より焼山山頂まで1時間、焼山より笹ヶ峰に下る。道は相当荒れている。泊まり岩は汚れている。付近に水は見当たらない。(詳細に水場を捜したわけではないので、はっきりしたことは言えない。)真川に出会うまで道ははっきりしている。真川より杉野沢橋までは 土砂崩れの場所

がかなりあり、route finding に苦勞する。渡渉が4度ばかりある。雨後の増水時は困難であろう。全コースを通じて厳しい。雨後は焼山から笹ヶ峰へ下るコースは控えた方が良いと思う。渡渉、route findingなどで岩崎バテ気味。それで、ザックを取り替える。杉野沢橋に着いたのは13:50、笹ヶ峰には14:20、最終バスで山小屋へ。山小屋に着くや、ビールで乾杯！

村田尚雄(10)

昭和44年8月26日(火)

岩崎、村田。

岩崎 下山。杉野沢まで一緒に下り、苗名滝を見に行く。カッコイイ滝である。 今日からまた、山小屋での一人暮らしが始まる。

村田尚雄(10)

昭和44年8月27日(水)

7時起床。午前中は洗濯、小屋掃除。午後 スキー場を越えて大谷ヒュッテへ向かう。カナメより先は爆破作業中で通行止め。仕方がないので引き返す。チンタラ、チンタラ鼻歌まじりで歩く。見晴らしが良いところで、1時間ばかりいろいろなことを考える。学校の事、卒論の事、友人の事等、散発的に頭に浮かんでくる。スキー場はススキの穂で覆われている。夏の終わりを告げているようである。ススキが揺れるたびに、僕を追い立てているように感じられる。「馬鹿野郎、もうお前の自由は、怠惰な精神は、終止符が打たれるべきだ。あきらめて早いところ下界へおりろ」周囲の山々が、こんな事を言って僕に迫っているようだ。この夏休みは 出来るだけ怠惰にすごそうと思った。僕の試みも もう終末に近づいている。新しい生活態度を築き上げる時期なのかも知れない。最後の最後まで 現在の生活に固執するつもりだった。僕の意志も、明日への不安で、もろくも崩れ去ろうとしている。Nothing comes from nothing!!

村田尚雄(10)

昭和44年8月28日(木)

8時起床、新潟大ワンゲル部員2名、小屋へ訪れる。2人と一緒に杉野沢まで下る。岡田氏宅で昼食 御馳走になる。トウモロコシのゆでたのが美味かった。夕食はラーメンで済ます。下宿で何時もラーメン作っているの、ラーメンには自信がある。ラーメンを食べ

ていると何かしら、腹の底より沸々とエネルギーが湧き起こってくるような気がする。侘びしさと、湧き起こるエネルギーとがMixされて 変な感じである。今日も又、侘びしさと悲しさのうちに一日が終わろうとしている。

所詮 駄馬は駄馬

駄馬なる故に大なる苦しみを背負って歩く

それにしても 背中の鞍は重すぎる

蒼々たる原野でなくとも良い

枯れ野の騾馬でありたい

・そこにはおのずと意がある。 村田尚雄(10)

昭和44年8月29日(金)

久しぶりの晴天。妙高登山。7時半出発。北アルプスが素晴らしい景観を見せてくれる。山小屋着16時半。

村田尚雄(10)

昭和44年8月30日(土)

6時起床、僕の試みもむなしく終わる。失意のうちに下山する。長々とお世話になりました。山小屋バンザイ！！

村田尚雄(10)